

<書評論文>

多文化主義社会下における エスニックアイデンティティの行方

Grant H. Cornwell and Eve Walsh Stoddard (eds.),
*Global Multiculturalism: Comparative Perspectives on Ethnicity,
Race, and Nation.* (Rowman&Littlefield, 2001)

三 浦 歩 空

はじめに

冷戦後の抑止力を欠いた世界構造の中で、民族紛争・民族対立は新しい世紀に入ってもうち止むどころか、勢いづく情勢にある。均質な国家というものが19世紀の理想によって神話化され今に続いているが、その追求というものがある意味、民族戦争の源となっていると言える。また民族対立と一口に括ろうにも、その内情は、ケースごとに経済的、政治的、宗教的、歴史的…とそれを取り巻く環境により状況は多種多様である。アメリカ合衆国のように国内の対立から、トルコ・イラン・イラク・シリア・旧ソ連の五カ国に散らばるクルド人のように国境を跨いだ問題も存在する。より微細な視点から見ても、日常における個人レベルの人種・民族主義的な暴力、抑圧は解決されたわけではない。また対立の主体とされる集団も、フランス系、イギリス系といったネイションを枠にするものから、ヒスパニックのように言語を軸にしたもの、また宗教、文化、性的志向などの違いをその基軸とする集団など様々である。そもそもこうした民族集団、文化集団の客観的な違いというものの自体規定し難く、曖昧な存在であると言えよう。これまでのナショナルアイデンティティへの同化主義やナショナルアイデンティティを軸とした文化的多元主義では覆うことのできなくなったこれらの国内的な、はたまた国境を越えた問題に対処しうる新しい概念としてマルチカルチャリズム（多文化主義）の価値及びそれへの期待が高まりつつあったのが、1990年代までの状況であった。この多文化主義の動きとしては、アメリカ合衆国での模索や、公的な政策として掲げられたカナダでの状況が有名であり、多くの注目を受けてきた事例である。しかしながら、このような多文化な状況下にある国々は何も、アメリカやカナダだけではない。多文化状況は国家と名のつくものに必然な様態である。むしろ植民地支配を受け、さらには帝国主義列強によって人工的に画定された直線のような国境を持つ発展途上国における状況の方がより複雑な様相を呈していると言える。また近代国家としての歴史が比較的古

いフランスやドイツ、日本などの国家よりも新興独立国家のほうがより国内の多文化状況に正面から向き合い、同化主義ではない道を模索している、もしくはせざるを得ない、ケースが多い。こうした状況をよりの確に、そして幅広く把握することを趣旨として、今回紹介する本著は編まれている。

1 本書の説明

本書は幅広い各分野の小論からなるものである。各論はそれぞれ異なる国家を対象としており、その分析の焦点は国家と国家を構成する多様な民族・人種、文化的集団との間に繰り広げられる緊張関係というものが如何様であるのか、という点に据えられている。本書の鍵となる前提のひとつに、実際には全ての社会が異なる歴史的背景と共に、文化的多様性と国家アイデンティティの形成に取り組んでいる、との認識がある。この認識のもとに五つの大陸に跨るケーススタディを通して、国内に内包されている差異についての国家の折衝の過程、及び対立を見て行く姿勢を貫いている。また執筆者も“西側”と“非西側”の両世界—ヨーロッパ・アジア・アフリカ、ラテンアメリカ—から選ばれているが、これはグローバルスタディへの学際的なアプローチの新しい模範として進展させていきたい、との趣旨によっている。ここでは各ケーススタディを、第一部のマルチカルチャリズムとエスニシティ・第二部のマルチカルチャリズムと人種・第三部のマルチカルチャリズムと政治の三つに大きく分けて論じている。第一部では、エスニックとして理解されている様々な差異がいかに作用し、認識されているか、またナショナルアイデンティティを巡る各集団間の折衝・支配権競合という点について論を展開している。まず G.Cornwell と E.Stoddard が、土着の人々や植民者が事実上存在せず、二つのディアスポラ集団によって成り立っているトリニダード・多巴ゴの事例を通して、ナショナルアイデンティティ定義を巡る二集団間の競争、及び両集団の混血人による集団間の分離を保っていた障壁の崩壊を危惧する思惑について紹介している。次に、A.Ramsay はタイにおける華人マイノリティー集団のタイ市民化はしても華人としてのエスニシティを保持し続ける事例をもとに、取り巻く環境に応じたエスニックアイデンティティの柔軟性を指摘している。J.DeGroat は、フランス社会において大きな人口を持つフランス系マグレブ人の存在により引き起こされたフランスナショナルアイデンティティの再評価の動きを描き出している。K.Fuoss と R.Hill はほとんど土着であるメスティソ集団が支配的な位置を占めるグアテマラにおける事例をもとに、エスニックアイデンティティとナショナルアイデンティティがいかにして想像され、競合され、実現されているのかという点について論じる。第二部では、人種的に特有とされてしまっている差異により引き起こされる問題とマルチカルチャリズムの関係を焦点として扱っている。E.Pereira と S.White は、ブラジルにおけるグラデーションのような多彩な人種関係がアメリカ合衆国における白人—黒人の二極対立解決の万能薬である、とするこれまでの神話の非現実性を暴く。J.Kling はアメリカ合衆国が歴史的に白人性をナショナルアイデン

ティティの不可欠な要素と見なしてきたとし、その中で黒人を始めとするマイノリティーは合衆国の歴史の語りの中からも排除され、よそ者としてそして見えない存在として囲い込まれてきたと指摘する。C.Nyamweru は自身がキクユ民族の夫を持つ白人系ケニア人という内部者の立場から、植民地時代及び新植民地時代のヨーロッパ人のケニア人に対するまなざしを明らかにする。H.Adams は他のアメリカ大陸の国家と異なる、カストロの社会主義革命により生み出されたキューバ社会を舞台に、白人アイデンティティからその優位性を奪い取ったアフリカ系または黒人アイデンティティの優位に注目し、その後の社会における人種関係を追っている。第三部は、多文化社会における中心となる競合、つまり誰が土着性を主張しえるのか、という点に着目し、土着の集団からのものの見方（パースペクティブ）を強調するメキシコやジンバブエなどの事例から迫る。P.Alden と J.Makumbe は植民地期及び独立後のジンバブエにおける土地分配がいかに人種的、民族的政治によって覆われてきたかを明らかにし、現在のジンバブエにおける白人—黒人間の危機的状況の背景を提示している。W.Hunt は内戦後、国内に二千ものコミュニティが欧米人などの外部者によって作られ、試行錯誤が行われているボスニアでの事例を通し、最も新しい多文化主義の挑戦を紹介する。L.O'Shaughnessy は土着の人々の貧困化と周縁化によってさらけ出されたメキシコナショナルアイデンティティの矛盾を分析する。A.Csete は清朝及び中華人民共和国の各時代における少数民族の歴史的な扱いと表現を比較し、フランスの共和国主義に通底するような人種や民族とは関係のない、儒教を媒介とした支配的アイデンティティ獲得に注目する。また、現在の中国政府の少数民族政策及び漢民族と少数民族との関係を検討しつつ、マルチカルチュラリズムの核心的問題、つまり一つの国家内で経済的・文化的に周縁化されることなく各集団は文化的な特徴を維持できるのか、という問いに迫っていく。L.Dupont と N.Lemarchand はカナダにおける公の政策としての多文化主義を取り巻く歴史と競合について、ナショナルアイデンティティに対する多文化主義の典型として、その限界を示しつつ検証する。

2 多文化主義

多文化主義のゆりかご、それは領域を国境で区切る国家の出現と歴史的な人口移動のプロセスが、その役を果たしたのであった。つまり、近代国家の誕生とディアスポラなどの移民現象が多文化社会を形作り、近代国家に見られるナショナルアイデンティティによる統合やナショナリズムの発揚による一体化といった手法では抑えきれなくなった多文化状況への処方箋として、多文化主義は生み出されたのである。概念としての多文化主義の源流をたどれば、アメリカの教育界にたどり着く。1970年代、教育界において西欧文明偏重的な教育を批判する観点から多文化教育が唱えられ、1980年代後半には教育界を中心に多文化主義という言葉は用いられるようになった。さらには、教育界を席卷したこの概念は職場にも拡がり、社会構造的にマジョリティの後塵を拝してきたエスニック・マイノリテ

ィを中心に広く主張されるに至る。「地位向上や権利拡張のために、エスニックアイデンティティを主張することがその実践的戦略となり、『アイデンティティの政治』という現象」（戴エイカ、1999: 49）を生み出す下地にもなった。こうした多文化主義の根拠の底流には、エスニック・マイノリティの社会的地位の低さやアメリカ人とはワズプを指し、アメリカ文化とは西欧文化を指すという神話が、文化多元主義の下でも相変わらずまかり通っていた、という現実があったと戴エイカは指摘している。多文化主義において最も重要なことは、個々の民族集団の言語・文化の存在が公的に承認され、それらの独自性と平等性が最大限に尊重されるということである（富田正史、1996: 17）。多文化主義の思想的基盤は、どの文化にも存在価値を認め、異なる文化間の比較でその優劣を決めることはできないという文化相対主義にある、と富田は定義しているが、同時に多文化主義と多文化相対主義の大きな違いとして、国民文化ではなくエスニック・グループや所属集団の文化を第一義的文化とし、核になる文化というものを認めずに、むしろすべての文化を相対化しようとする多文化主義の特徴を戴は挙げています。そのためアメリカにおいては合衆国の国家としての統一を脅かす概念として、またエスノセントリックな分離主義の表れとして批判され、支持者と反対者の間で激しい論争となっている。また支持者においてもその拠って立つ立場によって、例えば、「多元主義的多文化主義」¹や「特殊主義的多文化主義」²を主張するなど、一様とは言えない状況である。また国による実態も様々であり、多文化主義のあり方は当然多様なものとなってくる。現在ではカナダやオーストラリアなどで国家の公式の政策として多文化主義は採用され、他の国々、例えば本稿におけるトリニダード・トバゴやグアテマラなど、直面する国内の民族問題を解決し国民統合を促す術として、議論されるようになっていく。多文化主義は多民族国家が、分裂・解体することなく国民国家として生き残るためのイデオロギーとして機能している。多文化主義はナショナリズムと対比しうるイデオロギー、或いは運動であり、ナショナリズムがいわば単一文化的なネイション（単一文化ネイションではない）を形成・発展させるためのものだったとすれば、多文化主義は多文化ネイションを形成・発展させるためのものだといえる（富田）。しかしながら、多文化主義が素晴らしい可能性を秘めている、と手放しで賞賛できるわけではない。むしろ、先端を行くカナダやオーストラリアでさえ試行錯誤を繰り返している最中であり、アメリカ合衆国でもにおいても賛否が分かれている状態である。また、かつての文化多元主義が陥ったように、多文化主義もマジョリティ側の現状肯定の「すり替え」概念として利用される可能性も否めない。差異の認識が結局は社会的不平等という根強い問題を隠蔽し、永続させる役割を担って

¹ D.Ravitch の支持する主張であり、多文化状況を尊重した上での共通文化の存在を認証する立場をとっている。アメリカ合衆国の事例では、白人西洋文化を社会の共通文化として特権化、それを放置しているとして批判を受けている。

² 普遍的な価値として押し付けられるような形での共通の文化というものを否定する立場。M.K.Asante らが支持。然しながら、自民族中心적であるとすると批判も存在する。両者の立場の対立は、D.Ravitch と M.K.Asante の論争を参照（載 1999）。

いるのではないかと、との自省が促されている。この点は G.Cornwell と E.Stoddard によるトリニダード・トバゴや L.Dupont と N.Lemarchand のカナダでの事例でも指摘されている問題であり、多文化主義はこうした批判に晒されている現況にある。兎にも角にも、世界が、そして近代国家がその内部に抱える多様性に目を落とし始めた、否、目を覆っていることのできなくなった今日、その調和・均衡をもたらす有効性を問われる正念場に多文化主義は差し掛かっていると言える。

3 エスニックアイデンティティの変容

ここでは特に同化の波に洗われ、絶えず浸食されるエスニックアイデンティティのあり方に注目したい。これは、本稿で扱う多文化主義自体が国家からのナショナルアイデンティティ受容圧力を受けた人々によるエスニックアイデンティティ主張の動きをその原動力としているからである。多文化主義の状況とエスニックアイデンティティのあり方は唇歯輔車の関係にあるといえる。このエスニックアイデンティティを巡るダイナミックな動きを、ここでは特に A.Ramsay の「The Chinese in Thailand」を題材に論じていきたい。

3-1 タイ華人の現状—エスニック・リバイバル

タイは他の東南アジア諸国に比して華人のホスト社会への統合に成功した珍しい例だと、Ramsay は指摘する。この指摘は何も Ramsay に限らず大方の華人研究者の間に共通している認識である。1969 年のマレーシアでの民族暴動や華人排斥を意図したプミプトラ政策、1998 年のインドネシア・ジャワでの華人排斥暴動など、暴力を伴うまでの過度の民族的緊張をタイは経験していないという点で、やはり特異な存在であろう。なぜこのような共存関係は可能であったのだろうか。このタイ人と華人の間の関係を追っていく中で、Ramsay はエスニックアイデンティティの変容と、それを支える諸要因、そして多文化社会内でのアイデンティティ・ポリティックスを描き出していく。

従来、このタイの特異な状況は華人が多分にタイ社会へ同化し、文化的に適応した結果である、と 1950 年代までは考えられてきた。この考えのもとでは、タイ社会に馴染んだ華人達は次第にタイ人化していき、終には完全にタイ人になる、という方向で想定されていた。しかしながら、現状では、異なる様相を呈していると言わざるを得ない。1996 年の総選挙の際には、華人の由来を持つ政治家達が、中国姓や中国語を使ったりするなどチャイニーズネスを前面に出して選挙アピールを行ったり、1992 年には第二次大戦後の華僑移民のサクセスストーリードラマが驚異的な人気を博すなど、タイ人化するというよりも寧ろ華人系タイ人という立場を明確に主張し始めている。もちろんこれまでには、タイ市民化し、中国名を使用せずタイ人名を使うなど華人性を隠し、ある一定の同化の道を歩んできた

という歴史もある。しかし、同化に応じて単純に華人性を放棄していったわけではない、と Ramsay は強調する。

3-2 タイ華人を取り巻く諸要因

タイ華人の立場はその時々国内政治状況や中国本土との関係に影響を受けてきた。中国における共産党政権の誕生後はタイ華人の存在は政治的に危険視されたし、経済危機の際には政権側からしばしばスケープ・ゴートとされた歴史を持つ。また、そのタイ経済を支配する大きな経済力からも軍事政権などから睨まれ、異人集団として差別されるという体験も多く味わっている。同じく、昨今の変化、つまりタイの華人をしてそのエスニックアイデンティティを大っぴらに表現できるように状況を変化させた要素として、タイを取り巻く国際的な関係そしてグローバルな資本主義経済、国内の政治動向の影響を挙げられるという。具体的なそれぞれの事項の説明は紙幅の都合により避けるが、ここで Ramsay の主眼とするところは、エスニックアイデンティティはその取り巻く状況に応じて如何様にも変化する柔軟性を秘めており、人々も状況に応じて主体的にアイデンティティ・ポリティックスを行っている、という点である。

3-3 文化的アイデンティティ

先にタイ華人は次第に同化・文化適応しタイ人となる、という言説が存在したが、このような言説は依然として世界各国の社会的マジョリティによって信奉され、同化圧力として機能している。文化を固定的に考え、しかもナショナル・カルチャーを想定しそれへの同化を以って真にネイションとなる、という考えである。これらの論者達はタイ華人の同化の度合いを、中国人に特有の文化的行為、例えば冠婚葬祭の慣習などの喪失具合を以って推し測ろうとする。しかし、このような言説に対し Ramsay は、ギアツの言説を背景に、以下のように反論する。人間生活の全体のやり方を表すものが文化なのではなく、人々が経験し表現する意味を通して成り立ち、公にされ手にすることのできるシンボリックな形式こそ文化であるとするギアツの論に従うならば、文化的アイデンティティというものは固定的で、確固とした形式をもつものではありえない。‘チャイニーズネス’ というものは、その人のもつ‘中国的’な規範や価値観といったものの中身や本質としての的確に理解されるようなものではなく、中国人であるという文化的背景になるものは、一様ではありえないのである。また同じく、タイの文化的アイデンティティというものも純粋に、固定的に存在するものではない。そして‘タイ人らしさ’ というものも常に造られてきた理念上のものである、と Ramsay は指摘する。タイ民族もタイ華人も互いにタイ文化アイデンティティに影響を与えあっているのであり、それはタイ民族固有のものでもタイ華人固有のものでもないのである。以上のような観点から、文化的行為の有無をもとにエスニックアイデンティティを外部から規定することの誤りを指摘し、さらには‘タイ人らしさ’

というタイ国内におけるマジョリティ集団であるタイ民族を核に形作られたナショナルアイデンティティの恣意性と虚構性を衝いている。この点に関してはカレン族のフィールドワークを通じて、外部の観察者が識別する文化的境界と集団の枠組みは必ずしも一致していない、とするリーチの主張³と一致するものである。このようなエスニックアイデンティティを軸とする議論においては1960年代に、社会集団の存在の根拠を、客観的な文化的属性に置くか、主観的な帰属意識に置くか、という論争において後者の記念碑的主張になった、フレデリック・バルトの言説が有効となろう。バルトは、客観的に観察できる文化的属性の総体がエスニシティであるとする考えを否定し、いくつかの文化的特徴に焦点をあて、それをグループの象徴として強調することにより、グループのあいだに「文化的な不連続性があるという外観」をつくるのである、と主張する。彼によれば、「地球上の多様な文化は連続しており、それに仕切りをつけて個々の文化に分割することはできない」のである。その後のクレオールなどに見られる‘選択されるアイデンティティ’の諸状況を考えて行くと、これらバルトの古典的方法の核心は未だ有効であると言えよう。

終わりに

以上、多文化主義と本書における、Ramsay 論文「The Chinese in Thailand」をもとにエスニックアイデンティティの変容とアイデンティティ・ポリティックスの在り様を見てきた。タイ華人の事例を通して見えてきたことは、エスニックアイデンティティというものは同化の進捗に単に比例して、失われていくものではない、ということである。エスニックアイデンティティはその集団を取り囲む様々な情勢の影響下のもとに刻々と変容するものであり、しかもその変化の方向性は必ずしも一つではない。それはあたかも潮の満ち干のようである。このことは、ナショナルアイデンティティとエスニックアイデンティティのせめぎ合う多文化社会を考察する上で、興味深い視点を提供してくれるであろう。全ての人は自身の住まう国家によって課せられるアイデンティティと格闘している、と言える。そして課せられたアイデンティティというのは何もナショナルアイデンティティに限った話ではない。エスニックアイデンティティもまたそうである。こうした局面は、K.Fuoss と R.Hill によるグアテマラの事例や G.Cornwell と E.Stoddard によるトリニダード・トバゴの事例でも同じく垣間見ることができであろう。また、本書はグローバリズムの大きな流れと多文化主義の関わりを示唆するグローバル・マルチカルチャリズムという題名を冠している。が、しかしそれを反映した議論が成されているわけではない。こうした題名を冠する以上、進行するグローバリゼーションの脱近代国家作用及び経済、文化、社会組織等の地球化と、そこに産まれた間隙を縫って伸び行こうとする多文化主義の動

³ リーチE、1987、『高地ビルマの政治体系』。

きの連関に、より焦点をあてた論考があるべきところであり、その欠落が惜しまれる所である。然しながら、全世界で進行し、直面している多文化状況を各国家・当事者はどのように対処しようとしているのか、またその諸側面において多文化主義という概念はどのようにその力を発揮し、その限界を示しているのか。この点を多様な切り口から、ケーススタディを通じて直に切り取り例示してくれる、その新鮮さ、及び視点の豊かさが本書の魅力であると言えよう。本稿では紹介し切れなかったが、多文化社会を生み出すもととなったディアスポラの功罪やネイションの概念、またこれからの多文化社会において分裂を回避し、上手くまとめる戦略としてのクレオール性やハイブリディティの概念など、カルチュラルスタディーズの影響を強く受けた示唆に富む事例が本書には数多く紹介されている。こうした世界各地での多文化状況に対応する動きをケーススタディによって追うことは、多文化主義の射程を見定める際の一助となると共に、何にも増して、ネイションやナショナルアイデンティティ、エスニシティ、民族や文化といった概念の洗い出しにもつながるであろう。このような意味合いにおいて本書は非常に豊饒なテキストとなりうる。

参考文献

- 大杉高司、1999、『無為のクレオール』、岩波書店。
戴エイカ、1999、『多文化主義とディアスポラ』、明石書店。
富田正史、1996、『「多文化ネイション」に向けて』、晃洋書房。
山脇直司編、2000、『ネイションの軌跡』、新世社。
リーチ E、1987、『高地ビルマの政治体系』、弘文堂。

(みうら あゆぞら・修士課程)